

指導資料



鹿児島県総合教育センター

生活第5号

- 幼稚園，小学校，盲・聾・養護学校対象 -
平成15年11月発行

ふるさとに愛着をもつ子どもを育てる生活科の学習指導

生活科は、地域を舞台にし、生活に結びつく活動を行う地域に根ざした教科であり、子どもの身近な生活圏を学習（活動や体験）の場や対象として実践される。

生活科の学年の目標(1)には、「自分と身近な人々及び地域の様々な場所、公共物などのかかわりに関心をもち、それらに愛着をもつことができるようにする」と示されている。

このことは、子どもが自分の住む地域の身近な人々や様々な場所とかかわる活動や体験に熱中することを通して、自分のよさや可能性に気づき、生活することへの意欲や自信を一層もつようになることを目指しているのである。小学校低学年期の子どもにとって、自分の家や学校のある自分の住む地域は、まさしく「ふるさと」であると考えられる。

そこで、本稿では子どもがふるさと、つまり自分の住む地域に親しみを感じ、子どもにとって愛着のある人や場所をつくる生活科の学習指導について述べる。

1 愛着をもつとは

「愛着」とは、身近な人々や場所、公共物などに慣れ親しみ、それらに心が惹かれ、離れがたく感じることである。それは、直

接かかわる活動や体験を通してはぐくまれる。

例えば、子どもは自分たちの生活する地域について、「調べたい」、「知りたい」、「面白い」、「不思議だな」などと心の中に驚きや興味を抱き、繰り返しかかわることで、親しみを覚えていく。そして、繰り返し出掛けたそれらの場所へ離れがたい感情が生まれ、その特定の場所が好きになり、そこに住む人も含めて愛着をもつことができるのである。

小学校低学年期の子どもは、出会って親しくなった人のことを楽しく思い出すように、自分とのかかわりに関して身近な生活圏の人や社会、自然などを一体的にとらえるのである。また、この期の子どもの発達特性として、行動することと、思考し判断し表現することが、一体的になされる傾向が強い。

これらのことから、地域の人々、社会、自然を関連させ、地域の人々や場所に繰り返しかかわり、双方向性のある活動を工夫すれば、子どもにとってその人や場所は、ある特定の特別な経験となり、地域への親しみや愛着をもつことができると考えられる。多感な子ども時代に夢中になって遊び、学びを広げていった「愛着のある人や場所」をたくさんもつことで、豊かな心のふるさとづくりが実現できると考える。

2 地域への愛着をもたせる単元づくり

地域を学習の場とする生活科では、地域の素材を生かした単元の開発に取り組む必要がある。それぞれの地域は自然環境だけでなく、歴史や産業などに違いがある。そこで、教師が地域を熟知することで地域への愛着を育てる単元の開発を実現することができ、子どもたちへの適切な支援が可能となるのである。

次に、単元づくりの手順を示す。

(1) 地域環境の実態の把握

歩いて把握する地域環境

まず、教師自身が子どもの住む地域を歩いてみることである。子どもの身近な生活圏（通学路、遊ぶ場所、買物をするところ、人と出会うところ）に実際に出かけ、観察や調査をすることが必要である。教師も歩けば歩くほど、その地域のよさに気付き、ふるさとへの愛着に結びつく素材を見付けることができる。

次に、活動の観点をもって歩いてみる。例えば、公園や広場、野原などであれば、以下のようなポイントを調査する必要がある。

- ・ 遊べる空間があるか。
- ・ 様々な草花遊びができるか。
- ・ 季節で木々や植物の変化を感じ取ることができるか。
- ・ 地域の人々が利用し、その人たちに出会う機会が多くある場所か。
- ・ 安全な施設や場所であるか。
- ・ 子どもが歩く時間や距離は適当か。

さらに、校区地図や市町村地図など

で確かめながら歩いてみる。このとき、カメラやビデオカメラで撮影しておく、基礎的な資料を収集したり、生活科マップを作成したりする上で役に立つ。

地域の情報収集

地域をより詳しく知るためには、いろいろな情報を収集する必要がある。

子ども、保護者、地域の人々、報道等からの情報は、教師の地域環境の把握を更に確かなものとし、授業にその情報を生かすことで、一層子どもたちが地域のよさを知り、地域を好きになることにつながっていく。

子どもの下校後の遊びや生活について、一人一人の状況を把握することは個に応じた指導を重視している生活科では欠かせない。子どもから入手する情報として、子どもが持ってくる物、会話、日記など様々な情報を授業に組み入れていくとよい。

また、保護者や地域の人々からの情報を通して、地域の様子や行事、昔の様子や遊び、校区の人のことなどを知ることができる。

併せて、地域の特徴を把握するため、図書館や郷土資料館等に出掛け、地域の歴史、産業、文化などを調べておくと、更に地域理解を深めることができる。

(2) 魅力ある活動の場の設定と学習素材の開発

教師は、子どもが直接見たり、聞いたり、調べたり、接したり、探したりすることができる適切な魅力ある地域素材を見付け、教材化しなければならない。

魅力ある教材とは、行くたびに子どもが

新しい発見や気付きを体験し、楽しさを味わうことのできる学習素材のことである。

収集した情報から、子どもが直接かかわることができる価値ある素材かどうか、吟味する必要がある。例えば、

- ・ いつ、どこで、どのように地域素材が子どもとかかわっているか。
- ・ 子どもの興味・関心を引き付ける魅力があるかどうか。
- ・ 直接かかわる学習活動が繰り返しできるか。

など、十分考慮する必要がある。

そして、子どもにとって原体験の場と言える「愛着をもてる場所」となり得る場を、単元活動の舞台に選ぶことが大切である。

(3) 生活科マップの作成とその活用

生活科に関連する要素（人、自然、公共施設など）だけを地図上に表現する生活科マップを作成することは、活動の意欲付けや振り返りに活用することができる。

しかし、身近な人々や自然環境（樹木・草花など）、公共施設など要素が複数になると、生活科マップは煩雑になり、一枚に表現することが難しくなる。

そこで、公共施設、自然(季節ごと)などの要素別に複数の生活科マップを作るとよい。常に書き込んだり張ったり、いつでも活用できるように生活科マップ用の地図を掲示しておくようにする。そして、子どもたちが絵や文で感じたことを表現した情報や写真を張り付けていくとよい。

さらに、活動や体験に協力してくれる地域人材をマップに加えておくと、様々な活動に活用できる。なお、地域人材を紹介す

るときは、掲載する人に事前にその趣旨をよく説明し、協力を依頼することが必要であり、掲載する場合は必ず承諾を得ておくことが必要である。



生活科マップ

(4) 家庭や地域協力の積極的な活用

教師自身も子どもと地域行事に参加したり、地域の人々を知ったりして、地域のことをいろいろ学ぶことで、学校と地域のかかわりを深めていくことができる。

また、保護者からの紹介で地域の人々の協力を得ることができる。訪ねて話を聞いたり、学校にゲストティーチャーとして来てもらったりすることも可能になる。

このように、地域のよさを見いだせる場や人との出会いをきっかけにして、地域の探検活動や地域で生活する人、幼児や高齢者など、多様な人々との交流を積極的に何度も組み入れていく必要がある。地域の環境を積極的に活用したり、地域の人々の協力を得たりしていく中で、子どもたちは一層地域に対する親しみを増していく。

このような保護者や地域の人々の理解や協力を得るためには、事前の調査に加え、連絡を密に取り、生活科への理解を図り、協力を依頼する必要がある。そして、活動後には必ず電話や手紙などでお礼を伝える

ことが大切である。

この地域の人々とのつながりが、子どもたちと地域とのかかわりを深め、ふるさとへの愛着をもつことに結び付いていくことになる。

3 地域とのかかわりを深める学習活動例

地域の高齢者とかかわる活動を繰り返し設定することで、子どもたちが高齢者の豊かな経験と知恵に支えられ、高齢者のよさに気付くとともに、自分の住む町に興味・関心を高めていく学習活動の具体例を示す。

単元「できたできたよむかしのあそび」の学習活動（第2学年 2学期）

（日吉町立住吉小学校 溝江藤子教諭の実践を基に作成）

	主な学習活動と子どもの反応	教師の支援
第1次	1 敬老の日やそれまでの活動など自分と高齢者とのかかわりについて振り返る。 ・ 家族でおじいちゃんの家に行ったよ。 ・ 手紙も喜んでくれたよ。 2 高齢者がテーマの絵本の読み聞かせを聞き、昔からのいろいろな遊びを知る。 昔の遊びに挑戦してみよう。 ・ 私も幼稚園のころやったことあるよ。 ・ ばくもやってみたいな。 3 自分がやってみたいと思う昔の遊びをやる。 ・ 折紙ならすぐできるよ。 ・ こまを回してみたいな。本を見てみよう。 4 自分がやってみた遊びを振り返り、楽しかったことやまたやってみたいことを発表する。 ・ こまを回せるようになりたいな。 ・ おじいちゃんなら回せるんじゃないかな。 ・ 学校に来て教えてくれないかな。	昔の遊びへの興味・関心を高めたり、祖父母と遊んだ経験を振り返ったりさせるために絵本「おばあちゃんってすごい」の読み聞かせをする。 絵本に登場する昔の遊び（お手玉・けん玉・こま・あやとり・折紙など）の道具を事前に準備しておき、子どもたちの興味・関心が高まった場で紹介する。 やってみたい遊びやその理由、遊び方など問いながら、一人一人の思いや願いをつかむようにする。 子どもたちが安全で自由に遊べるような教室内の構成を行う。 遊び道具の使い方や片付けなど活動中に気を付けなければならないことについて、考えさせるようにする。 活動が停滞している子どもには、その理由や子どもの思いや願いを聞きながら一緒に遊んだり、学級文庫の本を紹介したりする。 興味・関心を持続させるために、遊び道具は、自由に使えるように教室に常時置いておく。 評価 昔の遊びに関心をもち、進んで遊ぼうとしている。【関心・意欲・態度(行動観察・つぶやき・振り返りカード)】
第2次	1 前時の活動を振り返り、本時の活動について確認する。 おじいちゃんやおばあちゃんに昔の遊びを教えてもらおう。 2 地域の高齢者を教室へ案内し、自己紹介をしたり聞いたりする。 ・ 初めて会う人もいて緊張するな。 ・ ばくの家の近くに住んでいる人だ。 ・ わたしのお母さんを知ってるんだって。 3 地域の高齢者に昔の遊びを教えてもらいながら一緒に遊ぶ。 ・ おじいちゃん、こま回しが上手だね。	前時までの活動を、生活科マップや振り返りカードなどを使って全体で振り返り、地域の高齢者との出会いに期待感をもたせるようにする。その際、あいさつや一緒に遊ぶ時の態度などを考えさせる。 参加してくださる地域の高齢者には、事前に遊びの内容を説明し、自己紹介や活動後の感想などの依頼をしておく。 自分がやってみたい遊びや招待状を送った方の確認をさせる。 うまくかかわることができない子どもやかかわろうとしない子どもには、理由を聞いたりこうしてみたらと具体的に行動の提案をしたりして、思いや願いの実現に向けて活動できるようにさせる。

（詳細は教育センターホームページ <http://www.edu.pref.kagoshima.jp> を参照）

地域において、見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶなどが可能な対象や場、子どもを支えてくれる人、友達と夢中で活動する場所などは、子どもにとって環境によって無意識に形成されるふるさとの原風景となる。同じ場所に繰り返し探検に行ったり、地域の人々とかかわったりする活動を通して、特定の愛着のある場所や人が増えることで、ふるさとへの愛着は深まり、ふるさとが大好きな子どもを育成することができる。

その実現のためには、各学校では地域の特

色を生かし、地域への愛着を深める魅力的な活動や体験を組み入れ、さらに、地域を舞台にし、地域に根ざした生活科の学習指導を進めていくことが大切である。

【参考文献】

文部省『小学校学習指導要領解説 生活編』平成 11 年 5 月

嶋野道弘著『改訂小学校学習指導要領の展開 生活科編』1999 年 明治図書

（第三研修室）